

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A:よくできている B:概ねできている、C:あまりできていない、D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策(来年度の具体的な取組目標等)
「心豊かなたくましい小島の子」	「いいね!」 「もっとやってみよう」	自分の好きな遊びを楽しむ中で面白さを見つけ、考えたり工夫したりして満足するまで遊ぶ	・子ども達が自分で選択できる環境を準備し、遊びの中で考える場、工夫する時間や満足できる期間の確保など考え保育してきた。その中で、子ども達が様々な物に興味を広げ、自分で考え、試し、遊びにじっくり取り組む姿が見られるようになってきた。	A	A	・子ども達が安心して自分がやりたい遊びを見つけ、じっくり遊んでいる姿がみられる。子ども自ら自分で考え、自分で決め、自分のやりたいことができる環境作りができている。「自己決定する力」、自分からという「自発性」を小さい頃から積み重ねていってほしい。 ・職員が子どもの主体性を重視し、子どものどこを大切にしたいか話し合いができ、共通理解と共通実践があると感じている。職員が子どもの内面をよみとり、個々を大切に關わることで、子ども自身が満足している。自分が満足することで、友達や周りの人への感謝や友達の良さを見つけることにつながっている。 ・小さなことでも感謝することが心の豊かさへつながっている。その気持ちを大切にしていってほしい。	・子どもの興味や発達に合わせて環境の準備をしたり、保育教諭自身が教材研究をして知識を深めながら子ども達に教材を提供できるように、引き続き意識していく。 ・子ども達が主体的に遊び、面白さや不思議さなど様々な感情を味わったり、遊びの中で感じたり考えたり表現する機会を大切にしながら保育をしてきた。一人一人の思いを大切に、認めたり共感したり任せたりしながら今後も保育をしていきたい。 ・保育教諭自身が周囲の方への感謝の気持ちを忘れずに言葉で伝えることを、引き続き行っていく。また、子ども達が自分で感じ、考え、行動することができるような援助や言葉かけを引き続き行っていく。
		自分の思いを伝えようとしていたり、友達の良さを見つけ、興味を持って関わろうとする	・保育者が、一人一人の思いを受けとめて丁寧に関わることを意識した。自分の気持ちを伝える機会を意図的に作り援助したりすることで、自分に自信を持ち、自分の思いを伝える姿が多く見られるようになってきた。今後も個を大切に關わることも、状況によって伝えられない子へのかかわりを考えていきたい。	B	B		
		様々な人に親しみを持って挨拶したり、自分から身の回りのことや片付け、手伝いなどやろうとする気持ちをもつ	・周りの人へ保育者から挨拶をしたり感謝の気持ちを伝えることで、子ども達も周りの人へ親しみをもって挨拶する姿が増えた。また身の回りことや片付けなどする姿を認めていくことで、自信をもって自分からやろうとする姿も増えた。	B	B		

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策(来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	個々の発達や経験の差を職員間で共通理解し個々に応じた教育・保育を行っている	・日誌への記録や降園後の振り返りの時など、子どもの姿や保育を職員間で伝え合い共有してきた。子ども一人一人の様子を丁寧に捉えて共有することで、一貫した対応がしやすくなり子ども達が安心して過ごす姿につながっている。子ども一人一人の発達段階を理解し、どのような姿に育って欲しいか保育者自身が願って保育していくことができるようになってきた。	B	A	・保護者の満足感が得られていることから、個々に応じた保育がされていると思う。子ども一人一人の思いを大切にし、職員間でも共有されていることで子ども達が安心して過ごしている。 ・子ども一人一人が生き生き伸び伸びと遊んでいる。1男児も2男児もそれぞれの生活を大切にしながら園生活を送っている。 ・子どもがどのような興味をもっているのか、職員がしっかりと見て環境の準備等がされている。先生の知識に子ども達が刺激を受けて、自分で調べたり、考えたり、興味の幅が広がり、遊びから生活につながっていると感じる。 ・事故防止、災害を想定した訓練を繰り返し行っていく事で、いざという時に瞬時に動くことにつながる。職員は想定外のこと起きた時どのような対応をするか大事になってくる。引き続き続けてほしい。	・職員間で子どもの姿や保育の共有を引き続き行っていく。子ども一人一人の姿をみとり、どのような姿が成長しているのか、どのような姿を保育教諭が支えて伸ばしたいのか、保育者自身が子どもをみとり考えながら、願いをもって保育していきたい。
		(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	・一人一人の気持ちを温かく受け止めたり生活の仕方やリズムに配慮したりして園生活が送れるようにしている	B	B		・様々な家庭環境があることを理解し、個々の生活リズムなど保護者と情報を共有し協力しながら、一人一人が安心して過ごせるようにしていきたい。
		(3)環境を通して行う教育及び保育	子どもの思いや遊びが楽しくなるような環境(遊具・教材)を毎日工夫している	・子ども達にとって魅力的になるような環境作りを心掛けたことで、「やりたい」「こうしたい」のイメージを膨らめながら、自分で考えたり調べたり工夫したりする姿につながっていった。今後も保育者自身が教材研究をしながら、子ども達の「やりたい」「もっと」の思いを実現できるような環境作りをしていきたい。	A	A	
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	さまざまな災害や事故について想定した訓練を実施し、その時々に確に行動出来るよう安全や事故防止への意識を高めている	・様々な災害の想定をして毎月避難訓練をすることで、子ども達も自分の身を守る方法をとっさに考えて行動する姿になっている。職員も避難訓練の度に振り返りをして反省を次に活かしていく事で、瞬時に判断して行動する大切さを確認できた。今後も様々な想定をした訓練を行い、緊急時に素早く動けるようにする。	B	B	・生活習慣については、家庭との連携が大切で、保護者への啓発を続けていってほしい。家庭に情報提供やメリットになることを伝えていってほしい。 ・個の表れを十分理解していることで、子どもらしさがでて、子ども達がいきいきとしている。職員がひとつになって子どもを理解し支援していくことで方向性が生まれていく。職員間で話し合い、伝え合い、共有していくことが大切。	・様々な想定をした訓練を行っていく。いざという時の職員の動き、連携など、緊急時に的確に動くことができるように訓練を繰り返し積み重ねていきたい。
		(1)健康教育の充実	起床・睡眠の時間が安定し、また食の大切さがわかり食べる事を楽しむなど「早寝・早起き・朝ごはん」の習慣が身につけている	・毎日、給食のメニューや食材について伝えたり、旬な食べ物を伝えたりし、食に関心が持てるよう意識してきたことで、子ども達が様々な食材や味を知り、好き嫌いが減り食べる量が増えた。また、定期的に早寝・早起き・朝ごはんについて話し、生活習慣が身に付くようにした。	A	A	
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	一人一人に合った支援計画を立て、園内研修で表れを伝え合ったり支援方法を学び合ったりしている	・個別の支援計画を立て、日々様子を記録している。また、降園後の振り返りの中で子ども達の様子を職員間で共有し、支援の方法などアイデアを出し合い保育につなげている。成長につなげていく細やかな支援方法が会議でできない職員に周知されていないので、同じ支援ができるように共有する機会を増やしていきたい。	B	B	・職員が少ない中で一人一人の抱える分掌の多さ、多忙、働き方改革、さまざまなことが叫ばれる中、当たり前に見直しをする必要性を感じる。保護者のフィードバックが少ないと保護者アンケートにあるが、子どもの姿から組織運営がされていると思う。 ・テーマや視点に沿って、組織で研修を重ねている。公開保育で保育を見合い、職員間で語り合い、学び合ったことを子どもに返していくことが大切。子ども達の姿から、成果につながっていると思う。小学校の先生が研修に参加することで、幼少期にどのように過ごしたか伝わり、就学がスムーズになっていく。	・引き続き、降園後の振り返りの時に子ども達の様子を共有していく。また支援計画や支援の方向性を全職員で共有しながら、一人一人に合った支援をしていくことができるようにしていきたい。
		(1)組織体制の充実	全職員が自分の分掌や役割に責任を持ち、協力し合い教育、保育を行っている	・自分の分掌や役割に責任を持ち進んできた。昨年度の実践を活かしながら職員間で協力して進めるようにしたが、細かな部分で見通しが持てず共有できなかったり準備がギリギリになってしまうこともあったので、早めに準備して進んでいきたい。	B	B	
6 研修	(1)研修体制の充実	研修テーマ『「やりたい!」「もっと!」の思いを引き出す援助と工夫』を意識し、日々の手だてを行い、園内研修を進めている	・毎日、手だてを意識した保育を行い、振り返りの時手だてに基づき日々の評価をしてきた。また、公開保育を通して保育を互いに見合うことで、保育について考えたり、学びを深める場となった。子ども達の遊びを見取り、環境の準備や援助を行うことで、子ども達から「楽しいね」「またやりたい」などの声が増えた。	A	A	・教育環境が整っていることで、子ども達が自分で創り出す楽しさや喜びを感じている。与えられてする経験より、自分でやりたいくなるような環境や経験が重要。園での学びが小学校に行った時に活かされている。 ・保育者の内容を見える化することで、保護者の理解や安心感につながっている。子どもの様子を口頭だけでなく写真などのような保育をしているか伝えることで、親子のコミュニケーションのきっかけにつながっている。 ・コロナ禍で薄くなったつながりがまた充実に向かっている。小学生との交流では、互いの心の成長や学びにつながった。幼少期からさまざまな人とかわることが大事。小島地区全体での交流の機会を今後も大切にしていってほしい。 ・地域を知ることは子ども達の成長だけでなく、地域の活性化につながる。いざという時の助け合い、存在意義を感じることも、学び合い、経験が豊かになること、自信をもつことなどにつながる。小島を誇れる子に育てたい。	・引き続き、送迎時などコミュニケーションをはかりながら子どもの育ちを共有していきたい。また、園からの発信の方法を工夫し、保護者に伝わりやすい掲示やおたよりを作成していく。
		(1)教育・保育環境の充実	豊かな体験が出来るように素材研究や、遊びを十分楽しめる道具や教材を準備し、考えたり、試したり、工夫したりして遊べる環境を整えている	・廃材、自然物等遊びを十分に楽しむことができるように準備してきた。保育者自身が教材研究の中で実際に調べて試すことで、子ども達にどのような道具や教材を提供するのか意識することにつながった。子ども達は様々な体験を通して、興味や関心が広がっていき、自分でも「やってみよう」とする力がついた。今後も引き続き、保育者自身が学びの手を止めないようにしていきたい。	A	A	
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	園での様子や遊びの紹介をクラスだよりやボードなどの視覚を使って発信し、保護者の思いを受けとめるが子ども達の育ちを共有している	・毎日、写真を使った保育ボード作りしたり、保護者へ伝わりやすいクラスだよりの作成をしたりすることで、子ども達の姿を共有していった。今後も子ども達の成長をわかりやすく発信していきたい。	A	A		
		(1)近隣の園との連携	近隣の小学校や園との交流を行い、園児、児童、職員とのつながりを深めている	・小学生や他園との交流の機会を年間計画に基づき実施した。また、計画以外にも小学校に風あげに行かせてもらったり、親子雑子会の伝承、運動会でボランティアなどの触れ合いを通して、小学校へ親しみや期待が高まっている。引き続き交流の機会を大切にしていきたい。	A	A	・園同士、小中学校との関わりを大切に、引き続き交流活動をしていく。交流を通して心の成長が育まれる機会を大切に、これからも積極的に交流していきたい。
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	様々な体験を通して地域の人や自然、文化に触れる機会をもち「小島が好きなお子」を育てている	・S型サーピス、中学校合唱祭、親王囃子保存会や地域の方との交流、地域行事への参加など様々な人と関わる機会を大切にできたことで、地域の場所や人への親しみを持つきっかけとなったり、子ども達の社交性が育まれた。今後も小島ならではの体験を大切にしていきたい。	A	A		・地域の文化に触れたり地域で遊んだり、人との交流の機会を大切にしながら、小島の良さを引き続き伝えていきたい。